

IV 平城京の調査

① 右京一条三坊三・四坪の調査（第112-1次）

調査地は西大寺東門の東約70mの位置にあたる。本来西大寺の寺地に含まれる一画であり、元禄年間作製の『西大寺伽藍絵図』には西大寺の付属建物が描かれている。また西大寺造営以前には、右京一条三坊の三・四の坪にあたり、坪境小路等の西大寺以前の遺構の存在も予想される地区である。このため三・四坪にわたって幅5m、長さ72mの南北トレンチを設定し、一部拡張部を含めて総面積490㎡を発掘した。

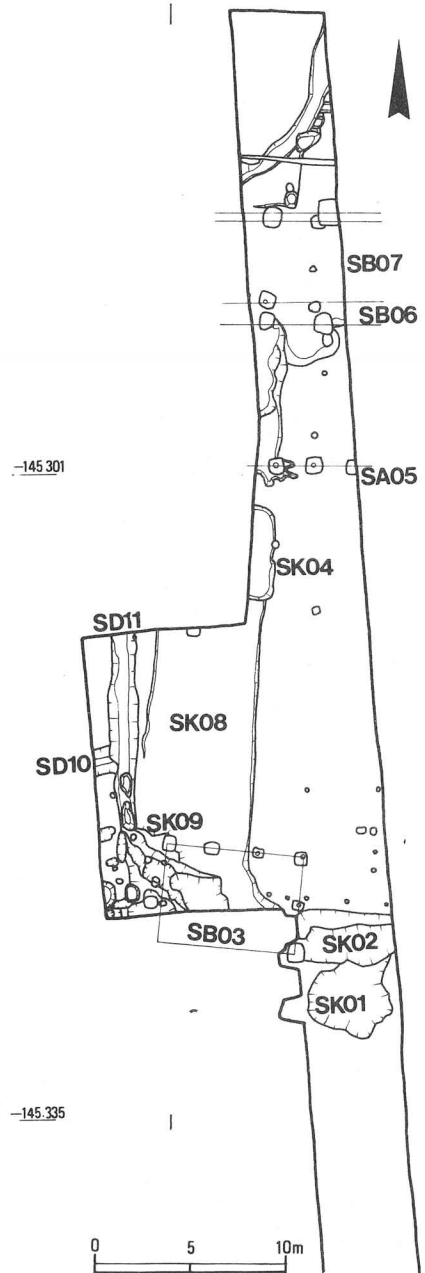
調査地は水田であり、床土を剥ぐと中世の攪乱層となり、その下には奈良時代の整地土層はなく、すぐ地山に達する。表土から地山までの深さは50~70cmで、北が高く南が低い。遺構はすべて地山面で検出し、掘立柱建物3棟、塀1条、大小の土壌多数がある。

SB03は桁行3間、梁行2間、8尺等間の東西棟建物で、北で東にふれている。

SB06・07はいずれも東西棟と思われるが、全体の規模は把握できなかった。

SA05は東西方向の塀で、2間分を検出した。
柱間寸法は6尺等間である。

SD11は調査区の西辺にある幅約1.4m、深さ約0.2mの南北溝で、南は中世の土壌SK09で切られている。



第7図 第112-1次調査遺構図

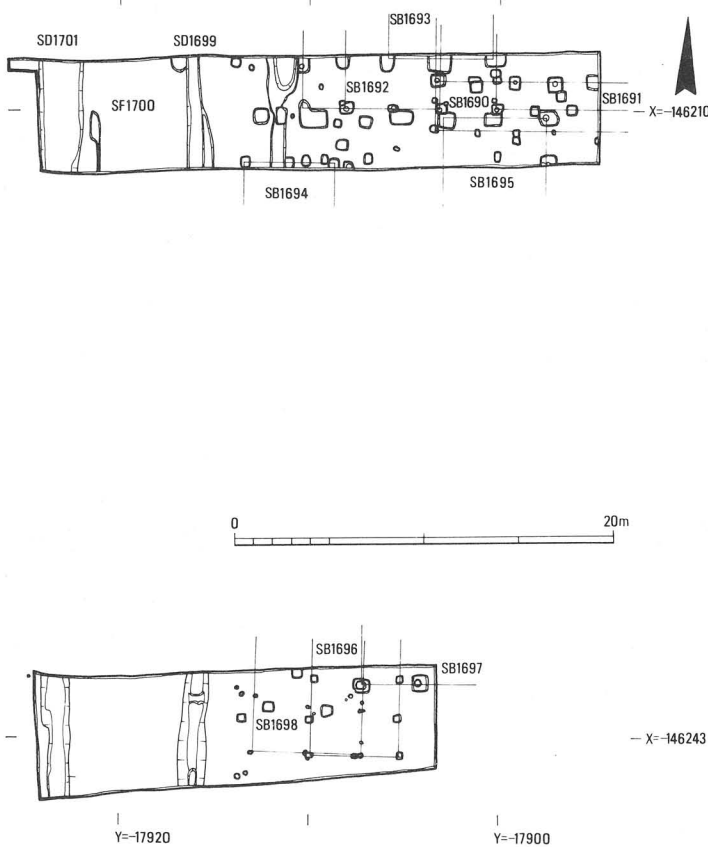
SD 10はSD 11に接続する幅約 1.2 m、深さ 0.1mの東西溝である。

発掘区北部と中央部で大小多数の土壌を検出したが、すべて中世に属す。SK 08は幅約 5.5m、深さ 0.1 m程度の南北にのびる浅い土壌で、北はSK 04に、南はSK 09に切られている。SK 01・02・04・09はいずれも瓦器、羽釜を含む。SK 02は東西方向にのびる土壌であるが、溝の可能性もある。

奈良時代に属する土器は少量で、瓦器、羽釜、灯明皿等の中世土器が大半を占め、大小さまざまな土壌から出土している。瓦類はほとんど出土しなかった。

奈良時代に属すと考えられる柱穴は浅く、痕跡しか残さないものもあり、この地域は中世に大きな削平を受けたことがうかがえる。しかし、奈良時代に属する

掘立柱の建物・塀・溝が検出された事は大きな成果であった。これらの遺構は西大寺造営以前の宅地に関するものか、それとも、西大寺に付属するものかは、今回の調査で確定できるような資料を得なかった。また、発掘区南端近くに予想された三坪と四坪の坪境の小路は削平を受けて検出されなかった。



第8図 第112 - 3次調査遺構図

② 左京三条二坊七坪の調査（第 112 - 3 次）

調査地は、平城京左京三条二坊七坪の西南部にあたり、宅地遺構および二坪との坪境小路が想定された。調査は坪境小路寄りに幅 6 m の東西トレンチを二本設定しておこなった。北トレンチは東西 30 m、南トレンチは東西 21 m である。

遺構は耕土、床土下の暗褐粘質土整地面と、その下の灰褐粘土地山面に検出した。主な遺構は掘立柱建物 9 棟、溝 2 条、道路 1 条である。

トレンチ西端にある南北道路 SF 1700 は、東西両側溝の路面幅約 5.5 m、側溝心々間約 7 m である。東側溝 SD 1699 は幅 0.7 ~ 1.5 m、深さ 0.4 ~ 0.7 m、西側溝 SD 1701 は幅 1.2 ~ 2.6 m、深さ 0.2 m である。

建物の平面規模は明らかでないが、SB 1690、SB 1692 は庇付きで、いくつかの柱根が残る。

遺物は瓦類、土器類のほか和同開珎 2 点が出土した。

瓦類には、丸瓦、平瓦の他に軒丸瓦 3 点、軒平瓦 4 点、鬼瓦 1 点、面戸瓦 1 点がある。軒丸瓦は 6225・6235・6307 型式、軒平瓦は 6664・6685・6691・6721 型式で、いずれも平城宮跡出土瓦と同範である。

土器類は、整地土中から奈良時代～平安時代初期の土師器、須恵器のほか陶硯・三彩陶器・土錘などが出土した。SF 1700 の側溝からは土師器、須恵器が量的にまとまって出土しているほかに、緑釉陶器・土馬・墨書土器・漆附着土器などがある。これらの年代は奈良時代初期から平安時代初期にわたっている。

今回の調査で検出した南北道路 SF 1700 から平城宮朱雀門までの距離は 665.55 m（2250 尺）である。この数値は、条坊計画の 1 坊（1800 尺）+ 1 坪（450 尺）に相当し、SF 1700 は二坪と七坪との坪境小路にあたる。小路幅は第 83 次、第 86 次調査で検出した三条二坊七坪と十五坪の坪境小路幅 6 m と比べると若干広がっているが、路面幅で小路の計画尺（20 尺）とほぼ同じである。また、整地土および小路側溝出土土器の年代によって、坪境小路は奈良時代初期から使われ、平安時代初期に坪内と道路が一体となって整地され、廃絶したことがうかがわれる。

七坪の宅地遺構は、調査地点が坪の西端であるにもかかわらず、多くの掘立柱

建物を検出した。これらは平面形式の判明するものはないが、整地土、柱掘形の重複関係から、少なくとも4時期あったと思われる。

七坪は第96次、第109次調査で明らかになった庭園遺跡（六坪）の北に隣接する。坪内の調査面積は少ないが、今回調査区での建物群検出状況や、平城宮跡出土瓦と同範の軒瓦、二彩陶器、緑釉陶器、硯などが出土していることは、坪の中心部分でおこなった第103-1次次査の結果とあわせて、七坪が京内における高級な宅地であったことをうかがわせる。

③ 北辺三坊の調査（第112-4次）

住宅建設に伴う事前調査で、建設予定地は北辺坊三坊一・二・三・四坪にまたがる。この坪境の小路の推定位置に、東西及び南北のトレンチを設定した。発掘面積は284㎡である。

東西トレンチの遺構検出はほとんど黄褐粘質土の地山面でおこなった。遺構は後世の攪乱が著しく、近世の浅い斜行溝を2条検出したにとどまった。遺物は瓦及び土器の破片が出土したが量は多くなかった。

南北トレンチにおいても後世の攪乱が著しく、主要な遺構としては、南北溝1条、土壇4基、井戸1基を検出した。

南北溝SD232は、幅約1.5m分を検出し東肩がトレンチ外となる。溝底は黄褐色粘質土の地山に及んでいるが、年代は新しく、遺物もほとんど含まない。

SK233はトレンチ中央部で東西方向に重複する土壇で、遺物はほとんど含まずSK234を切る。SK234は東西約2m、南北約3mの方形状の土壇で、東西隅は溝状となり、東へ延びる。SK235はSK234に切られる土壇で、西肩はトレンチ外に出る。

SE237はST236の北に位置する井戸である。掘形は約2.5mの方形で、その中央部分に一辺約1mの正方形で木製の井戸枠が組まれている。井戸枠は高さ約1.8m分が残存していた。その構造は、四隅に直径10cm程の丸柱を立て、上下二段に断面円形の横木を枘差で入れ、下端部外側に幅25cm、厚さ5cm程の横板を留

で組み、その外側に各面5枚ずつ二重に縦板を並べて囲っている。この井戸は出土遺物の年代から平安初期のものと推定される。

遺物は、この井戸から土師器の杯C一点が完形品で出土したほかは、いずれも断片で、量も全体として多くない。土器類は大部分が土壌SK234～6から出土し、年代も奈良時代後半から平安時代のものが多い。

以上のように、当初予想された坪境の小路は、トレンチ内では、後世の攪乱のために明らかにすることができなかった。

④ 北辺二坊の調査（第112-7次）

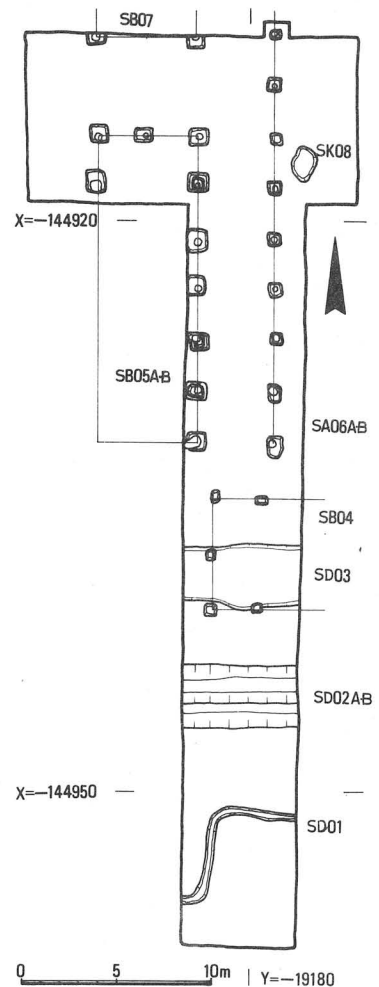
駐車場造営に伴う事前調査。西側隣接地は、昨年度の調査（第103-16次）によって、平城京右京北辺坊二・三坪にまたがる建物群と北京極大路の遺構が明らかになっている。今回の調査では、二坪内の利用状況及び北京極大路について新たな知見が得られるものと予想された。発掘面積は約360㎡である。

検出した主な遺構は奈良時代のもので、掘立柱建物3棟SB04、SB05-A・B、SB07、柵1条SA06-A・B、溝2条SD02-A・B、SD03がある。

SB04は桁行1間（8尺）以上、梁行2間（10尺等間）の東西棟建物である。

SB05-A・Bは桁行6間、梁行2間、9尺等間の南北棟建物でSB07はSB06の北18尺の位置に柱筋をそろえて建つ一対の柱穴である。

SA06は9尺等間の南北塀で、SB05・07の東14尺の位置に8間分を検出した。SA06、SB05、



第9図 第112-7次調査遺構図

SB 07はいずれも柱間を9尺として柱筋を揃え、同位置での建替えが認められるなど、同一建物になる可能性がある。

SD 02は東西溝で、新旧二時期がある。SD 02 - Aは幅1.8 m、深さ0.5 m。SD 02 - Bは幅2.2 m、深さ0.5 mで、SD 02 - Aを埋戻したのち北に約4尺ずらして掘込んでいる。SD 03はSB 04の廃絶後にできた溜り状の東西溝で、幅3.1～3.5 m、深さ約0.2 mである。このほかに古墳時代の土壙SK 08、平安時代の蛇行溝SD 01がある。

出土遺物は少なく、遺構と関連するものとしては、SD 02 - B、SD 03の埋土から奈良時代末の須恵器・土師器、SB 05の柱抜取穴から奈良時代末の須恵器甕、SK 08から古式土師器、SD 01から平安時代中頃の土師器碗が出土した。

今回検出した建物群は、第103 - 16次調査で検出した桁行7間、梁行4間の二面庇建物を含む建物群とは一部塀によって画されることから、屋敷地を異にすると考えられ、屋敷地そのものは更に東に広がっている。

⑤ 右京一条二坊二坪の調査（第112次 - 8次）

駐車場造成に伴う事前調査で、発掘面積は約350 m²である。調査地は、秋篠川東岸近くの水田で、耕土・床土下に黄褐粘質土層があり、この下の灰褐砂質土ないし、黄灰粘質土面（地表下約0.4 m）で遺構を検出した。

検出した遺構には、建物・塀・溝・堅穴状遺構のほか多数の土壙があり、奈良時代と古墳時代に区分できる。

奈良時代の遺構には、掘立柱建物3棟SB 01・05・13、溝3条SD 11・17・20がある。建物3棟はともに南北棟建物で、SB 01は桁行2間（10尺等間）以上、梁行1間（12尺）以上、SB 05・13はともに桁行4間（10尺等間）以上、梁行2間（10尺等間）である。両建物は柱筋をそろえ、19尺の間隔をおいて東西にならぶ。SB 01はSB 05の東20尺に位置するが、柱筋がやや北にずれる。SD 11はSB 05・13の北辺を西に流れる幅0.3～0.5 mの東西溝である。SD 17・20は平行して南に流れる幅1.2 m前後の南北溝で、両溝を側溝とする道路SF 18は二・七坪

の坪境小路と考えられる。溝心々で 8.3 m (約28尺) あり、西一坊大路心からの距離は 480 尺を測る。

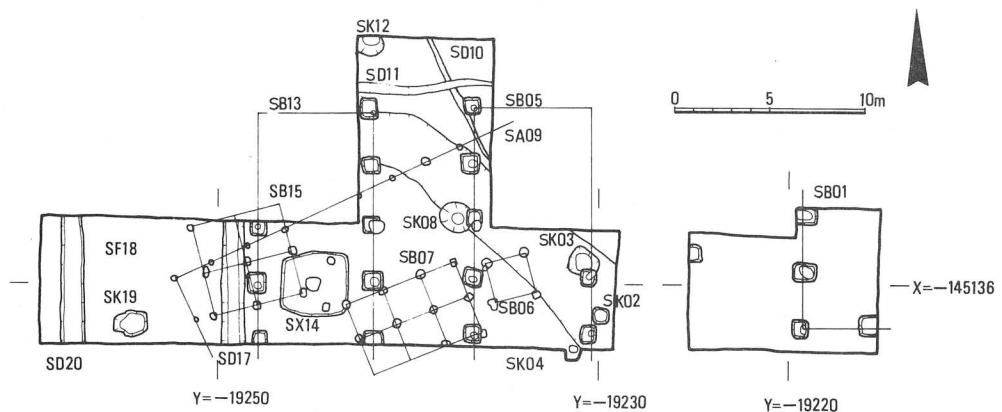
古墳時代の遺構は、切り合い関係及び出土遺物などから 3 小期に区分できる。

古墳時代 A 期には SX 14、土壇 SK 02・03・08・19 などがある。SX 14 は一辺約 3.4 m、深さ 0.2 m のややいびつな方形の堅穴住居址で、中央に炭化物を含む径約 0.7 m の円形炉址、隅の 2ヶ所に浅い方形の柱穴がある。4 世紀に属す。

古墳時代 B 期には掘立柱建物 SB 06・15 がある。SB 06 は桁行、梁行とも 1 間 (2.3 m)、SB 15 は総柱建物で、桁行 2 間 (5.0 m) 以上、梁行 2 間 (5.0 m) である。

古墳時代 C 期には掘立柱建物 SB 07、柵 SA 09・16、溝 SD 10 がある。SB 07 は総柱建物で、桁行 3 間 (6.3 m)、梁行 2 間 (4.2 m) である。SA 09・16 は SB 07 の北西及び南西を画す。SA 09 は 8 間 (16.8 m) 以上で、さらに東にのび西端では南に直角に折れる。SD 10 は幅 0.2 m で、SA 09 に直交して東南方向に流れる。SB 07 の柱穴出土の須恵器片によって、C 期は古墳時代後期と考えられる。なお、発掘区東辺で東南方に蛇行する小流路は古墳時代以前である。

出土遺物はそれほど多くない。奈良時代の遺物としては、SB 05 の柱穴から奈良時代後半の須恵器壺、SD 17・20 から奈良時代の丸・平瓦が出土している程度である。古墳時代では、SX 16・06・08・19 から古式土師器が一括出土した。



第10図 第112 - 8次調査遺構図

今回の調査の結果、これまで西一坊大路心から西 450 尺に位置すると推定された二・七坪の坪境小路は、からに30尺ずれて検出されたこと、また、坪内は建物の規模が大きく、しかも南北棟建物を東西に整然と配置しており、一般の宅地というよりむしろ官衙的性格を示すものであることなど、新しい知見を得た。

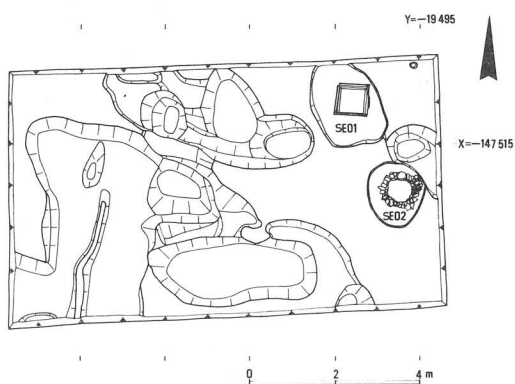
古墳時代の遺構は昨年第 103 - 7 次として調査した北東の隣接地でも検出されており、今後の調査によって集落の様相が更に具体化されるものと思われる。

⑥ 右京五条二坊十二坪の調査（第 112 - 9 次）

家屋新築に伴う事前調査として、平城京右京五条二坊十二坪内の調査をおこなった。発掘面積は60㎡である。

土層の堆積状況は床土の下に灰褐土・暗灰粘質土層があり、その下は地山の灰白土である。遺構は床土下30cmの暗灰粘質土上面で検出した。主な遺構は平安時代の井戸SE01、中世の井戸SE02と多教の土壇である。

SE01は上下二段にわかれる。下段は方60cmで、厚さ約5cmの板を3段の井籠組みにしている。上段は方80cmで柱を四隅に立て、各辺に縦板を3枚ずつ並べている。上段は側板の下部分が残存しているだけであるが、井戸枠の組み方は隅柱に横棧を渡して縦板を固定したものと考えられる。井戸の底にはバラスを敷いている。井戸掘形の大きさは1.3m×1.8mで、深さ約2mである。この井戸は掘形及び埋土から出土した土器により平安時代と考えられる。



第11図 第112-9次調査遺構図

SE02は丸・平瓦や河原石を使用して積上げた瓦積みの円形井戸で、上方は直径55cm、底は直径95cmほどである。井戸掘形の平面は卵形で長径約150cm、短径約130cm、深さは約115cmまで確認したが、さらに深い。この井戸は掘形出土の土器から中世以降のものと考えられる。

その他、発掘区の西側で大小多量の土壌を検出した。土壌の平面形は不整形で深さは40cm前後である。これらの土壌は地山の灰白土がミガキズナに使用できることから、地山土を採集した穴と思われる。

遺物はSE 01から土師器・須恵器・緑釉陶器・黒色土器が出土した。またSE 02の使用瓦には奈良～中世までのものを含み、軒瓦の中には瓦当面に薬師寺、唐招提寺の文字を飾ったものがある。他に土壌から、中・近世の瓦が出土した。

⑦ 南面大垣の調査（第112～11次）

この調査は、平城宮南面の東西水路改修に伴う事前調査としておこなったものである。調査は宮の南面大垣遺構および、朱雀門遺構の有無を確認するために、5ヶ所にトレンチを設定しておこなった。調査の結果、朱雀門の位置では門の基壇と礎石抜き取り痕跡を東西方向で5間分検出し、この西側に設定したトレンチにおいて南面大垣遺構の残存を確認した。他のトレンチでは何らの遺構も検出できなかったが、その位置は埴地に相当する。

朱雀門の礎石抜き取り痕跡には、6ヶ所とも直径20～40cmの根固め石がよく残り、掘形も浅く残る。基壇の基礎は掘込み地業によってなされ、東西31.6mの規模である。掘込み地業の深さは、発掘区が狭少なため約1.3mを確認するにとどまった。築成土は5～10cmの厚さで、黄褐色砂質土や礫を含んだ粘質土であり、これらを瓦層に築きあげている。

門の平面規模については第16・17次調査（昭和39年）で桁行、梁行ともに17尺等間という成果を得ている。今回検出した桁行5間分の根固め石は、前回の調査で検出した棟通り柱筋から17尺南にあり、朱雀門の全柱位置を確認した。

南面大垣は、地山まで削って整地を施した面に、砂質土や粘質土を互層に積んで版築している。良好なところでは約0.8mの高さで残っている。大垣基底部の地山面と、今回改修を行う水路をへだてた南側の地山面とでは、大垣基底部が若干低いので、大垣築成にあたって掘込み地業がなされた可能性が認められる。

遺物は瓦類だけで、軒瓦は全て藤原宮式に属し、前回調査と同じ状況である。